

## 中国における日本のクイズの魅力語る授業の試み

## —日本語学部の専攻生を対象として—

李 縁舟

中国四川外国語大学成都学院日本語学部

1980年代以来、中国では日本語ブームが続いており、大学や日本語学校で日本語を学習者は増える一方だ。しかし、中国の日本語教育には課題がある。日本語教科書が頻繁に更新されない点や、中国の大学では日本語学習の目標を単純に単語の発音を習得すること、文法を暗記すること、日本語能力試験に合格することなどとしている点である。学習者は日本文化に触れずに学習するので、日本語を勉強する意欲を失ってしまうことが多い。よって、日本文化についても、日本語教育の中で扱う必要があると考えられる。そこで、本研究では、日本文化の中でも学習者の学習意欲を惹きつけると考えられるクイズ文化を題材とし、中国の四川省において日本語学部の専攻生を対象に日本のクイズ文化を理解させるという授業を開発した。研究の結果、日本語学部の専攻生を対象に授業を行い、日本のクイズ文化を学ぶことを通して学習者に日本語への学習意欲を高めることができた。

キーワード：中国、日本語専攻、日本語教材、クイズ、日本語教育

## 1. 背景

## 1.1. 中国における日本語ブームの状況

周知の通り、中国と日本は同じアジアにある「一衣帯水」の隣国であり、二千年にもおよぶ友好往来の歴史がある。1972年に、中日両国の国交が正常化して以来、中日関係が改善すると共に、政治、経済、文化などのあらゆる分野での国際交流が盛んである。1978年に、中日平和友好条約が締結されたのをきっかけに、中日両国はあらゆる分野にわたる交流が一段と頻繁になりつつある。その影響により、中国全土において日本語ブームが沸き上がり、中国における日本語教育の発展に拍車をかけた。

現在、中国における日本語教育は初等教育<sup>1</sup>、中等教育、高等教育、その他教育機関で行われている。1970年代から続けてきた日本語ブームの影響により、近年、各大学で日本語科の定員が拡大しており、日本語科の学生が急増している。それと同時に、日本語に興味を持ち、日本での就職や留学をするために民間の日本語学校で日本語を勉強する人数も増えている。本稿で対象とする日本語専攻生は中国の大学における日本語学部（本科）の学習者に限定されている。

独立行政法人国際交流基金（The Japan Foundation）<sup>2</sup>（以下「国際交流基金」と略す）は世界の日本語教育の現状を正確に把握するために、数年おきに「日本語教育機関調査」を実施している。国際交流基金の『2012年度日本語教育機関調査結果概要抜粋』<sup>3</sup>によると、中国の教育機関で学ぶ日本語学習者は100万人の大台を超え、韓国を追い抜き、全世界で第1位となった。さらに、初等・中等・高等教育機関及び民間の語学学校に所属する学習者以外に、独学者も含めると日本語学習者は非常に

多い人数に達すると思われる。

比較対象として、2006年から2015年までの十年間の日本語教育機関調査結果<sup>4</sup>を表1に示す。

表1 2006年～2015年日本語教育機関調査結果

| 年度<br>(年) | 機関数<br>(個) | 教師数<br>(人) | 学習者数<br>(人) |
|-----------|------------|------------|-------------|
| 2006      | 1,544      | 12,907     | 684,366     |
| 2009      | 1,708      | 15,613     | 827,171     |
| 2012      | 1,800      | 16,752     | 1,046,490   |
| 2015      | 2,115      | 18,312     | 953,283     |

以上の調査結果からわかるように、2006年から2012年まで中国における日本語教育機関数、教師数、学習者数が急速に増えていた。しかし、2015年度中国の日本語学習者数は約95万人になり2012年度と比べ学習者が1割減となった。

なぜ2015年以降、日本語の学習者の成長率が低下したのか。その理由は、2012年以降の中日間の政治外交関係の冷え込みによって「中日関係は中日国交正常化以来最悪の状態」と宣伝されたことだと考えられる。この影響により、日本語教育の先行きへの不安で日本語を学ぶ学習者は減少したと思われる。このような学習者が減少する年もあるが、概ね機関数と教師数は穏やかに増えていると言えるだろう。

## 1.2. 大学における日本語教育の現状

上記の調査に基づいて、中国における日本語教育がどの教育機関で中心的に行われているのかを明らかにするため、国際交流基金による「2015年度日本語教育機関調査結果学習者数 内訳」<sup>5</sup>を挙げて分析していく。

その結果を、以下表2に示す。

YuanZhou LI : The Attempt to Carry Out a Course on Accounting The Charm of Japanese Quiz in China  
Undergraduate student of the Department of Japanese,  
Chengdu Institute Sichuan International Studies  
University

表2 2015年度学習者数 内訳

| 教育段階        | 学習者数 (人) | 割合 (%) |
|-------------|----------|--------|
| 初等教育        | 1,573    | 0.2    |
| 中等教育        | 52,382   | 5.5    |
| 高等教育        | 625,728  | 65.6   |
| その他<br>教育機関 | 273,600  | 28.7   |
| 合計          | 953,283  | 100.0  |

表2の通り、現在の中国における日本語教育が中心的に行われているのは、高等教育機関である大学であると考えられる。

日本語専門教育は、「高等院校専業外語教学指導委員会」（和訳：国家教育部の大学外国語専門教育指導委員会）の指導の下で行われている。1990年に『高等院校日語専業基礎段階教学大綱』（和訳：大学日本語専門基礎段階における学習指導要領）（以下、「基礎大綱」と略す）が出版され、2001年に『高等院校日語専業高学年教学大綱』（和訳：大学の日本語専門高学年段階における学習指導要領）（以下、「高学年大綱」と略す）が発表され、「基礎大綱」（以下、「改定基礎大綱」と略す）が改定された<sup>6</sup>。

「基礎大綱」は中国の高等教育における日本語専攻教育を開拓する先駆けとなった文献である。これによると、「聴、説、読、写、訳」（和訳：聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと、翻訳すること）といった五つの能力の養成を中心とした言語コミュニケーション能力の習得に重点が置かれていることが分かる。

また、教育の目的、要求、内容、原則などを規定するため、「改定版基礎大綱」には次のように記述されている。

学生に日本語の基礎知識を着実に身につかせ、聴く・話す・読む・書くなど基本的な技能を訓練し、実際に言語を運用する能力を養い、学生の日本の社会と文化に関する知識を豊富にして文化を理解する能力を育成し、高学年段階の学習にしっかりとした基礎を作る。<sup>7</sup>

これによると、中国高等教育機関の日本語教育の改革方向が示している。しかしながら、授業では言語の教学を中心に教えている。王（2012）は中国の大学日本語教育の問題点について以下のように指摘した。

①中国の大学で行われている日本語教育は、理論的知識と語学能力の養成を重視している。しかし、そこには、専攻生が暗誦力を持つことはできるが日本語の応用能力には不足があるという問題がある。

②教科書の開発と更新が頻繁に行われなため、日本語の現状または日本の社会と乖離するおそれがある。

③中国の大学で用いられる教科書の中で、絵、図、グラフなどの挿絵の使用がほとんどない上に、各課の語彙・文法の量が多く、また難しい日本語の表現を多用しているため、学生の興味関心が低下してしまう問題もある。<sup>8</sup>

授業の中では伝統的な言語教育の方法に従っており、日本語の実用能力を身につけることはあまり重視されて

いないようだ。しかし、日本語を専攻する学生には、大学入学時に日本語を何も知らない状態から始めて、卒業時に中・上級レベルに達する学習者が非常に多い。その理由は、大学同士が学校の名譽を保つために、常に学生に試験の成績の重要性を強調しているからである。日本語専攻生は在学中に大学専攻日本語四級、八級試験<sup>9</sup>以外に、日本語能力試験<sup>10</sup>N1を取らなければ卒業することができない。そして、日本語専攻生にとっては、日本語能力試験の結果は自分の日本語能力をはかる唯一の基準だといっても過言ではない。そのため、専攻生は日本語を勉強することは自分のためではなく試験のためだと考え、日本語を勉強する意欲は削がれてしまうのだ。

### 1.3. 日本語教科書への批判

学校の授業で用いる教科書は学校教育の重要な文書である。教科書とは、「その教科の学習指導上の中心となる書物」<sup>11</sup>と定義される。したがって、教科書の品質と日本語専攻生の日本語能力の育成は密に関連することがわかる。専攻生の日本語能力<sup>12</sup>を高めることは、教科書の助力なしには考えられない。

現在、中国で市販されている日本語専攻の総合日本語授業用教科書は10種類以上ある。その中で、現在の大学の日本語専攻で最も多く使われおり、多くの部数が発行されている教科書は『新編日語（改訂版）』<sup>13</sup>（上海外語教育出版社）と『総合日本語（改訂版）』（北京大学出版社）である。ほかに、『新編基礎日本語』（北京大学出版社）、『基礎日語総合教程』（高等教育出版社・北京）、『日語』（上海外語教育出版社）なども学校によって採用されている。本稿では、日本語学部（本科）の専攻生に対応する『新編日語（改訂版）』（上海外語教育出版社）と『総合日本語（改訂版）』（北京大学出版社）という二種の教科書を選び、日本語教科書の現状を検討する。

2009年に出版された『新編日語』（改訂版）は大学日本語科専攻学科の基礎段階の教科書として、日本語専攻生を対象によく使われている。「『新編日語』の製作は十年前にさかのぼることができる。この教材は1990年の春から作られ始め、4年間の作業を経て4冊の大学日本語専攻学科基礎段階使用のテキストとして完成されたものである。」<sup>14</sup>という。この教科書はシラバスに規定された発音、語彙、文法などの日本語の基礎知識を学生に教え、それによって日本語を活用する初級能力を身につけさせることを目標としている。しかし、10年にわたってこの教材は更新されていない。余りにも言語知識にこだわったために、「内容が古い」、「実用されない」と「表現が不自然」などの批判がなされている。

2009年に発売された『総合日本語』（改訂版）は初めて中日両国の大学や教育部門が協力して編集した教材である。『総合日本語』は言語知識だけではなく、日本語のコミュニケーション能力を身につけさせることを重視している。特に、日本語の知識を知る背景となる日本文化・文学・社会・中日交流その他に関わる理解も図り、大学生に相応しい知的レベルの高い日本語能力を養うことに力を入れている。『総合日本語』は、「日本語専攻生にふさわしい表現豊かで「自然な」日本語の使い手となることを目指す」<sup>15</sup>という。しかし、『総合日本語』は「「自然な」日本語を使いこなせることを強調し、日本語の言語知識をそれほど重視していないことがわかる。

概して言えば、『新編日語』と『総合日本語』の両方とも学習者たちのニーズに応じてはいないようである。さ

らに、日本文化と言語知識を理解しないかぎり、日本語を勉強するのは難しいと推測できる。したがって、この二つの教材は学習者にとっては、学習意欲を高められないことが明らかである。

## 2. クイズ文化の導入

### 2.1. クイズとは

#### 2.1.1. クイズの定義

『クイズ文化の社会学』(2003)は日英の辞書定義を統合し、「クイズ」を次のように定義されている。

①英語の第一の用法に倣い「質問に答えるゲームまたは競争」。

②日本語の日常的用法から「テレビ(ラジオ)のクイズ番組」。クイズ番組とは、放送メディアのジャンルのひとつとらえられる。<sup>16</sup>

この定義によれば、「クイズ」は「ゲームとしてのクイズ」と「放送メディア・ジャンルとしてのクイズ」に分けられる。

#### 2.1.2. クイズの形式

クイズの形式はなぞなぞ、早押しクイズ、短文クイズ、長文クイズ、○×クイズ、択一クイズ、シチュエーションパズル、あるなしクイズなどが挙げられる。

2003年に発売された『最強!クイズ番組読本』<sup>17</sup>では、よくクイズ番組に出てきたクイズの形式を「突撃○×泥んこクイズ、1対1対決クイズ、団体戦、ゲスト&アンケートクイズ、大声クイズ、マラソンクイズ、ライド系クイズ、双子神経衰弱クイズ、タイムレース、数字獲得クイズ、ギャングブルクイズ、解答席までの長い道、バラマキクイズ、奇襲クイズ、通せんぼクイズ」などのように分類している。

このように、ゲームとしてのクイズの形式が多だけでなく、放送メディア・ジャンルとしてのクイズの形式も豊富だとわかる。

#### 2.1.3. 日本におけるクイズの由来

江戸時代には、クイズの原型と呼ばれる「判じ物」が広く流行した。『日本大百科全書(ニッポニカ)』の解説によれば、「判じ物」は以下のように定義されている。

文字や絵にある意味をあてつけて判じさせる謎解(なぞと)き。絵のものを「判じ絵」、字のものを「字謎(じなぞ)」などともいった。江戸の町人社会で戯作者(げさくしゃ)中心に流行し、その類の版本もつくられた。その余流はなお今日のクイズものにも残っている。<sup>18</sup>

引用からわかるように通り、「判じ物」の誕生は日本のクイズ文化の基礎を定めたと言っても過言ではない。

#### 2.1.4. 日本におけるクイズの発展

1946年12月に日本最初のクイズ番組としてNHKのラジオ番組『話の泉』<sup>19</sup>が放送され始めた。その後、多くのラジオによるクイズ番組が登場したが、テレビの普及に伴い、娯楽性を強調したクイズ番組が次々と登場することになった。

『クイズ文化の社会学』(2003)では、クイズ番組が「知識人解答型、視聴者解答型、タレント解答型」という三つのタイプに分類されている。

第一の知識人解答型は、NHKの『私の秘密』に代表される、知識人が解答者となるようなクイズ番組である。テレビ草創期の一九五〇年代半ばから六〇年代半ばまでが全盛期で、一九六〇年代末には姿を消した。

第二の視聴者解答型は『アップダウンクイズ』に代表されるような、視聴者が解答者となり、知識を競い合うことにより、賞品や賞金を獲得する番組である。一九六〇年代はじめに現れ、七〇年代から八〇年代半ばにかけて全盛をきわめた。

第三のタレント解答者は、『世界・ふしぎ発見!』に代表されるような、ドキュメンタリー風の取材映像をもとにしたクイズにタレント解答者が答える番組である。八〇年代半ばから九〇年代にかけて全盛をきわめた。<sup>20</sup>

引用からわかるように、日本のクイズ番組の歴史が長い、クイズ番組の発展が早いことがわかる。

## 2.2. クイズ文化の重要性

### 2.2.1. 日本伝統文化の学習

日本は伝統文化への保護と継承を非常に重視している国であることが世界でも認められている。茶道、書道、花道、能楽、枯山水、歌舞伎などが古くから日本文化として継承されている。このことから、クイズのジャンルが豊富であり、幅広い知識を網羅していることは明らかである。クイズ番組の中で、日本の伝統知識が頻繁にクイズとして、出演者に問われる。クイズに携わることによって、日本の伝統文化を学ぶことだけでなく、日本民族の発展史を学ぶことができる。

### 2.2.2. 学習意欲を高める可能性

近年、日本ではクイズが既に新たな頭脳競技となっている。参加者は主に学生や芸能人などである。一部のクイズプレイヤーは出題傾向と解答ルールを把握することを通して優勝を目指しながら各クイズ大会に参加している。また、競技クイズは早押しクイズだけでなく、3択クイズ、短文クイズ、長文クイズなど大会やイベントによって多種多様な競技形式で行われている。知識・技術・駆け引き力だけでなく、設問に合わせて臨機応変に対応していく適応力、さらに反射神経まで、知能を総動員してたった1つの正答を導き出す戦いとなっている。よって、学習した知識を活用する能力を身につけることが重要であると言えるのではないだろうか。また、クイズの知識が幅広く、中には最新の情報・知識も含まれているため、クイズ大会に参加する前に、選手は様々な書籍と資料を調べ、必要な知識を準備しなければならない。その知識を調べる過程も自主学習である。

## 2.3. 中国における日本語教育への考察

丁(2013)は「文化の定義」について、以下のよう述べた。

人類文化学の観点からいうと、文化は二つの意味を持っている。一つは狭義の文化であり、また人文

文化とも呼ばれ、歴史、文学、政治、哲学などを含んでいる。もう一つは広義の文化であり、生活慣例や社会の風俗習慣などを含んでいる。集団に属する文化は、集団によると、西洋文化、東洋文化、日本文化などに名づけられ、その歴史、地域、観念、言語、民族伝統などを共存、共感の基礎としている。その「主流文化」に対して、一民族や一地域の内部では、企業、階層、職業、性別、村落などによって違う「下位文化」もある。<sup>21</sup>

この定義によれば、文化は複数の形式を持つ、具体的なものではなく、時空を超えて人間社会の発展と共に継承されているものである。日本文化はクイズという形で継承され、クイズをする者はクイズに答えると同時に日本文化の学習もしている。

また、言語は文化の産物であり、文化の背景を具現しつつある。すなわち、日本語そのものは日本文化の有機的な一部分として、長い歴史の過程で日本民族に形成された自然観念、社会秩序、考え方などを表している。日本語をビルに喩えると、語彙はそのビルを構成するブロックのような建築材であり、文法は接着剤のような存在であり、日本文化はそのビルの内包である。日本語の学習には語彙と文法知識を欠かせないが、文化知識がないと学習生活には魂が寄せていないようである。それで、日本語にある文化的な物事を理解せずにはうまく日本語をマスターできないわけである。

その上で、クイズの魅力を知り、日本のクイズ文化を勉強すると共に、日本の伝統文化も把握することが期待される。また、学生がクイズに惹かれ、自らクイズのやり方で学習を推進する可能性がある。もちろん、学校側が日本のクイズ大会を真似して、日本能力の競い合う試合を行ったら、学生の知識欲を蘇らせることができると思われる。

### 3. 授業の研究

#### 3.1. 研究の目的

本研究では中国における日本語教育の現状と問題点を踏まえ、日本のクイズの魅力語る授業を開発することを通して、クイズ文化の導入は学生の学習意欲を高めることができることを明らかにする。日本のクイズ文化の歴史ややり方を学ぶことによって、日本のクイズ文化、クイズの魅力についての認識が深まると考えられる。それを通して、日本語への学習意欲を呼びかけることができると目指している。

#### 3.2. 研究の方法

本研究は、2019年1月2日、四川省におけるある大学で、日本語学部の二年生(30名)を対象に授業を行った。

研究をするにあたって、日本のクイズの定義と形式を調査し、日本におけるクイズ文化の発展概況を明らかにした。また、日本のクイズが長い間親しまれてきた主な原因も事前に分析した。クイズと日本語教育に関する先行研究の資料を整えた上で、授業を開発する。授業の難易度を、授業の感想などから確認する。そして、学習者たちの感想を参考しながら、本授業プログラムの有効性を明らかにする。

#### 3.3. アンケート調査で見るクイズ文化の導入の可能性

##### 3.3.1. アンケートを行う目的

本研究では、現在中国における日本語学科の専攻生が教科書にどの程度満足度しているのかと日本文化のどのようなことを学びたいのかを調査した。また、アンケートの結果は、授業の開発の参考にする。加えて、アンケートの結果は本稿において、学生たちの日本文化への関心やクイズ文化への理解の度合いを分析することとこれからの課題を考察する際に参考資料として活用した。

##### 3.3.2. アンケートの内容と結果

アンケートの内容と結果を表3に示す。

表3 日本語教育における現状についての調査 (N=312)

| 順番   | 問題                  | 割合 (%) |      |      |
|------|---------------------|--------|------|------|
|      |                     | 興味     | 留学   | 就職   |
| 質問1  | なぜ日本語学科を選んだのか       | 74.4   | 14.1 | 11.5 |
| 質問2  | 語彙と文法だけを勉強する授業はよいか  | 10.6   | 84.9 | 4.5  |
| 質問3  | 日本文化の知識を教えて欲しい      | 85.2   | 7.4  | 7.4  |
| 質問4  | いま使っている教科書に満足しているか  | 13.1   | 70.2 | 16.7 |
| 質問5  | 教科書で更新すべき内容は何か      | 言語知識   | 日本文化 | その他  |
|      |                     | 11.2   | 72.1 | 16.7 |
| 質問6  | 授業中の内容は全部理解できているか   | 58.9   | 11.6 | 29.5 |
| 質問7  | 日本文化の勉強は学習に良い効果があるか | 67.6   | 12.5 | 19.9 |
| 質問8  | 日本文化に関すること自主学习しているか | 13.8   | 75.0 | 11.2 |
| 質問9  | クイズという単語の意味を知っているか  | 6.1    | 86.9 | 7.0  |
| 質問10 | クイズ番組を見たことがあるか      | 6.1    | 90.1 | 3.8  |

##### 3.3.3. アンケートの結果分析

調査対象は中国における日本語学部在学中の学生である。回収調査表は312枚である。

質問1の調査の結果によると、興味で日本語学科を選んだ人が総人数の74%以上を占めている。

質問2の調査結果を見ると、「語彙と文法だけを勉強する授業はよいか」に「いいえ」を選んだ人の割合は84%以上を占めている。それで、授業内容として「語彙」と「文法」の知識だけでは学生を満足させないことがわかる。

質問3の調査結果から見ると、「日本文化の知識を教えてほしい」ことを「はい」と選んだ人が多くて、85%以上を占めている。学生たちが日本文化への学習意欲が高いことがわかる。

質問4と質問5の調査結果を見ると、70%以上の学生は今使っている教科書に対して満足していないことがわかる。さらに、更新する場合には「日本文化」と選んだ人の割合が72%を超えている。それで、日本文化に興味を持つ日本語の学習者が多いことが推測できる。

質問6の調査結果を見ると、「授業中の内容は全部理解できているか」で「わからない」と選んだ人が29.5%いる。「わからない」を選んだ学生は授業に追いつけていないと考えられる。また、学生自身が授業に集中していなかった可能性もある。このような状況になってしまっている原因の一つとしては授業の展開の仕方の問題があると推測できる。

質問7と8の調査結果から見ると、「日本文化の勉強は学習に良い効果があると思うか」で「はい」と答えた学生が67.6%を占めているが、「日本文化に関すること自主学习しているか」で「いいえ」と答えた学生が75%を占めている。学生が日本文化の勉強の重要性が認識している、自分で日本文化に関することを勉強することがあまりないということがわかる。授業中に教師が何を教えるかが学生に大きな影響を与えたと考えられる。

質問9と10の調査結果を見ると、「クイズという単語の意味を知っているか」で「いいえ」と選んだ人が86%以上を占めている。「クイズ」という言葉が教材に載ったことがないことが原因だと考えられる。さらに、日本文化に乏しいことで、クイズ番組に関心を持っていないのは不思議ではない。

要するに、大学における日本語専攻生たちが日本文化を重視したり、興味を持ったり、教科書の更新と授業方法の改善を望んだりすることが明らかである。

## 4. 授業の開発

### 4.1. クイズの魅力語る授業の試み

はじめに本授業プログラムを開発する経緯について述べていく。

先に述べたように、クイズは日本の青少年教育において大きな役割を果たしている。一方で、中国の大学における日本語教育の発展に伴い、学生に日本語での言語知識を教えるばかりでなく、日本の歴史・文学・社会・習慣などの日本語の背景となっている日本文化に対する理解も深め、学生の人文的な資質を養成することも、現在の大きな課題となっていると考えられる。日本のクイズブームの背景から分かる通り、クイズの文化を理解し、クイズの試合を通じて、日本語の専攻生は自分の知識がどの程度あるのかを確かめ、自分の臨機応変と実践力を上げる効果が期待される。よって、学生に「理解させる」ことの一步を踏み出させるために、授業の実践が必要であると考え、本研究の授業を開発した。

### 4.2. 授業の実践

#### 4.2.1. 授業事前アンケート

学生の日本語能力を把握するために、授業事前アンケートを行った。内容は前述の全国日本語学部生向けのアンケートとかぶっている部分があるのが、それは学生が日本文化の学習状況を明らかにするためである。

日本文化の学習状況調査の内容は、次の表4のように示している。

表4 日本文化の学習状況調査(N=30)

| 順番  | 問題                  | 割合(%) |      |      |      |
|-----|---------------------|-------|------|------|------|
|     |                     | N1    | N2   | N3   | なし   |
| 質問1 | 日本語能力試験の等級          | 3.3   | 20   | 10   | 66.7 |
| 質問2 | なぜ日本語学科を選んだのか       | 76.7  | 16.6 | 6.7  |      |
| 質問3 | 日本文化の知識を教えて欲しい      | 70.0  | 10.0 | 20.0 |      |
| 質問4 | 日本文化に関すること自主学习しているか | 13.3  | 60.0 | 26.7 |      |
| 質問5 | クイズという単語の意味を知っているか  | 3.3   | 90.0 | 6.7  |      |
| 質問6 | クイズ番組を見たことがあるか      | 3.3   | 93.4 | 3.3  |      |

#### 4.2.2. 授業事前アンケートの分析

質問1の調査結果を見ると、このクラスの中で、日本語能力試験をまだ受験したことがない学生が多いことが分かる。日本語能力試験は毎年7月と12月にしか行われず、また学校側もN3のレベルを要求していないので、二年生の1月にまだ受験していないことはおかしくない。

質問2の調査結果から見ると、趣味で日本語科に入った学生が76%を超え、全国のデータより少し少ないが、クラスの中では大多数を占める。

質問3と4の調査結果から見ると、全国のデータと同じように、このクラスの中で、日本文化の知識が教えてほしい学生が多いが、自主学习できる人数は少ないことが分かる。

質問5と質問6の調査結果から見ると、「クイズ」の意味を知らない人と「クイズ文化」に関心を持っている人がほとんどいないことが分かる。

まとめると、今回の授業は学生に対して新たな知識を教えることだと言っても過言ではない。クイズの由来から発展経緯まで、詳しい説明しなければならない。また、学生にクイズの魅力語るのも難度が高い。

### 4.3. 授業の概要

本授業は四川省にあるA大学日本語学科の二年生30名を対象として実践した。

【実施校】 四川省A大学日本語学科の二年生

【日付】 2019年1月2日(水)

【時間】 8:55~9:40

授業の流れは、次の表5に記述した通りである。

表5 学習活動と内容

| 時配  | 学習活動と内容                                                                                                  |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 3分  | 1.あいさつ<br>◎筆者の自己紹介を聞き、授業のテーマを知る。                                                                         |
| 5分  | 2.クイズって何？<br>◎単語としての意味を知り、語源の由来を知る。<br>◎クイズの形式を知る。                                                       |
| 10分 | 3.クイズ文化って何？<br>◎判じ絵でクイズを体験する。<br>◎クイズは日本における平安時代から今までの発展を知る。                                             |
| 12分 | 4.クイズの魅力って何？<br>◎クイズ番組のビデオを見て、競技クイズ選手の熱情を感じる。<br>◎クイズは日本社会に長い間、親しまれてきた原因を考える。                            |
| 10分 | 5.クイズと日本語の勉強の関係って何？<br>◎クイズは日本語の勉強に何が役に立てると考える。<br>◎班に分けて、意見を発表する。                                       |
| 5分  | 6.授業のまとめ<br>◎クイズの定義と形式を知る。<br>◎クイズの発展が渡った歴史を知る。<br>◎クイズは日本語の勉強に必要な役割を果たすことを知る。<br>◎授業の感想とコメントをワークシートで書く。 |

授業のワークシート<sup>22</sup>は、図1のように作成した。

図1 ワークシートの内容

#### 4.4. 授業の実践

まず、学生に「クイズは日本社会に長い間親しまれてきた原因」というテーマについて考えさせ、結論を以下の通りに記述していた。

- ① 伝統文化の継承の需要に合致している。
- ② 青少年の競争意識を培う需要に合致している。
- ③ 参加者の「知識の幅を広げる」、「思考力を培う」、「自分をアピールする」などの要求に合致している。
- ④ 主催者側の視聴率・広告収入を上げる需要に合致している。
- ⑤ 関連する書籍・ゲームソフトの販売の需要に合致している。
- ⑥ 日本地方の観光宣伝の需要に合致している。

次に、学生に「クイズは日本語の勉強に何が役に立てる」というテーマについて考えさせ、発表した主な意見は以下の通りに記述している。

- ① クイズで日本語を勉強するのは面白くなると感じられる。
- ② クイズ番組で日本文化の知識が学習できる。
- ③ クイズ番組で日本事情が分かる。
- ④ クイズによって知識への競争心を燃やすことができる。
- ⑤ クイズ文は日本語への学習意欲を高めることができる。
- ⑥ クイズで言語知識を習得したら、受験勉強が楽になる。

#### 4.5. 授業全体への考察

本授業のねらいは日本のクイズの魅力を生徒に語り、「クイズは日本語の勉強に役に立てことに気付く」と設定した。

実際に授業を行うと、時間を大幅に超過することなく授業時間内に授業を行うことができた。

今回の授業を行う途中、学生たちが日本のクイズ文化に興味を持って、判じ絵でクイズを体験する時にどんどん発想してきた。正解にも関わらず、学生が自分の日本語能力にまた自信をもって、積極的な態度で授業に参加した。それにより、日本のクイズ文化を理解することができていたと推測できる。また、コメントを振り返って、クイズとクイズ文化は新鮮であり、学習に役に立ると回答した学生が多い。

### 5. 今後の課題

今回の授業は、時間の関係で、クイズ番組のビデオを見ることはできたが、競技クイズを体験できなかった。今後は競技クイズのステージを設けて、学生に体験させる必要があると考えている。できるだけ、言語知識と日本文化に基づき、日本のクイズ大会を再現したい。また、今回の授業の内容はスライドで学生に見せることが多く、単調であったため、次回はクイズ大会の現場の音声を用いて、クイズをやる雰囲気を作り出す。

最後に、今回の授業は中国の四川省の日本語学部の二年生に限られていた授業であるが、今後、日本語学部における他の学級の学生に実践することを計画している。また、中国の他の地域、また、他の日本語学習機関にお

いても実践をかさねたい。

- <sup>1</sup>遼寧省や黒龍江省、その他地域の一部の小学校では校長の采配により日本語教育が行われている。
- <sup>2</sup>独立行政法人日本国際交流基金は 2003 年に独立行政法人となった「総合的に国際文化交流を実施する日本で唯一の専門機関」である。  
<https://www.jpfa.go.jp/about/index.html> (2019 年 3 月 9 日最終確認)
- <sup>3</sup> 国際交流基金 (2012) 『2012 年度 日本語教育機関調査 結果概要抜粋』  
[https://www.jpfa.go.jp/project/japanese/survey/result/dl/survey\\_2012/2012\\_s\\_excerpt\\_j.pdf](https://www.jpfa.go.jp/project/japanese/survey/result/dl/survey_2012/2012_s_excerpt_j.pdf) (2019 年 3 月 9 日最終確認)
- <sup>4</sup> 日本語教育機関調査  
<https://www.jpfa.go.jp/project/japanese/survey/result/> (最終確認 2019 年 3 月 1 日) に参照されたい。
- <sup>5</sup> 出典 国際交流基金 2015 年度日本語教育機関調査結果学習者数内訳  
<https://www.jpfa.go.jp/project/japanese/survey/area/country/2017/china.html#RYAKUSH> (最終確認 2019 年 3 月 27 日) に参照されたい
- <sup>6</sup> 教育部高等学校外語専攻教学指導委員会日本語グループ (2001) 『高等学校日本語専攻基礎階段教学大綱』、大連理工大学出版社、p.1
- <sup>7</sup> 同上、p.1
- <sup>8</sup> 王小姣 (2012) 「中日の大学における日本語教育の比較」、南京師範大学 2012 年度修士論文  
<http://cnki.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?QueryID=6&CurrRec=58&recid=&filename=1013105122.nh&dbname=CMFD201301&dbcode=CMFD&yx=&pr=&URLID=&forcenew=no> (最終確認 2019 年 3 月 1 日)
- <sup>9</sup> 中国における大学の日本語専攻学科の学生対象。四級試験は大学 2 年次終了時に受験。八級試験は大学 4 年次終了前に受験。
- <sup>10</sup> 日本語能力試験は原則として日本語を母語としない人を対象に、日本国内及び海外で、日本語能力を測定し、認定することを目的としている試験である。
- <sup>11</sup> 山田忠雄、柴田武、酒井憲二、倉持保男、山田明雄、上野善道、井島正博、笹原宏之 (2012) 『新明解国語辞典 (第七版)』、三省堂、p.268
- <sup>12</sup> 日本語能力とは、読み書き能力、実際の活用能力、総合的な日本語能力である。
- <sup>13</sup> 周平・陳小芬 (2009) 上海外語教育出版社。初級から中級まで全 4 冊、ほぼ 1 学期 1 年 2 学期制) 冊の進度で進められる。1、2 冊目は初級向け、3、4 冊は中級向けである。
- <sup>14</sup> 周平 (2003) 『新編日語』について考える、『日本学研究』、第十三期、p.65
- <sup>15</sup> 坂田雪子・守屋三千代(2008) 「日本語教科書の課題と提言—『総合日語』執筆・編集を通じて—」 香港日本語教育学会編 『アジア太平洋地域における日本語教育』第 2 巻、344-
- <sup>16</sup> 石田佐恵子、小川博司 (2003) 『クイズ文化の社会学』、世界思想社、p.4
- <sup>17</sup> テレビ発掘プロジェクト (2003) 『最強!クイズ番組読本』 白夜書房
- <sup>18</sup> 日本大百科全書より  
<https://kotobank.jp/word/判じ物-606486> (最終確認 2019 年 3 月 1 日)
- <sup>19</sup> 日本で初めてのクイズ番組。放送期間は 1945 年～1964 年である。
- <sup>20</sup> 石田佐恵子、小川博司 (2003) 『クイズ文化の社会学』、世界思想社、p.22
- <sup>21</sup> 丁静 (2013) 「文化の視角から見る日本語の婉曲表現」、山東師範大学 2013 年度修士論文  
<http://cnki.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?QueryID=1&CurrRec=14&recid=&filename=1013215541.nh&dbname=CMFD>

201302&dbcode=CMFD&yx=&pr=&URLID=&forcenew=no  
 (最終確認 2019 年 3 月 1 日)

<sup>22</sup> 本研究の授業が行われた大学において、ワークシートを副教材として授業に導入することは初めてである。

#### 謝辞

本論文の作成にあたり、終始適切な助言を賜り、また丁寧な指導をして下さった藤川大祐教授に感謝します。

そして、本研究の趣旨を理解し快く協力して頂いた研究協力者の皆様に心から感謝します。本当にありがとうございました。